Tell-me-in'（てるみん）

自営愚民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｅｌｌ－ｍｅ－ｉｎ'（てるみん）

【Ｎコード】
Ｎ１１７６Ｉ

【作者名】
自営愚民

【あらすじ】
夜間哨戒中に不思議な「音の出る何か」を発見したエイラとサーニャ。その不思議な音の世界に魅せられて…。電子楽器のようなものとサーニャの物語です。かっこいいエイラが見られます。でも結局ヘタレです。

たとえそうとは思えないとしても―夜空には常に微かながら、何かの音が響いているものである。たとえば風の音、ジェット気流、眼下に望む都市の喧騒、鳥の鳴き声―いや、聞こえないとしても、その風景から何か音が出て来るような思いに駆られることすらあるのだ。

その事を一番知っているのは、一度ならず夜を飛んだ者達かもしれない。夜空の音、それはどのような物なのだろうか…。

「なあ、サーニャ。さっきから何か聴こえるよ…」

「えっ、エイラ、何も聞こえないけど？」

彼女たちが飛んでいるイングランド上空高度１５００ｍ。魔導エンジンの音と風切音以外は何もないように思える。

「ほら、よく耳を澄ましてみないと」

そう言ってエイラは、サーニャの耳にそっと、後ろから手のひらを当てる。

「あ…」

「ナ、ほら聴こえるだロ？」

「ほんとだ。」

微かに聴こえた音、それをストライカーで飛びながら、二人は耳に手を当てて聴く。それが何の音なのか、何の音でも無いなら、どのように感じればいいのか、思いを巡らせながら…

「不思議…だけど、きれいな音だナ。」

何の音でも無い、名前のない美しい音が微かに鳴る。それはまるで、魔法によって生み出された不思議な色の蝶が、止まる場所を探して舞っているようでもある。

「なんか、あったかい音…。」

サーニャも目を閉じ、その音の世界へと没入する。音は寒い心を

温める。寂しさが優しさで包まれていく。そして、懐かしさと記憶がよみがえる。
「どこかで、聴いたことあるかも…ちょっとテルミンの音みたい」
「テルミン？」
「そう、オラーシャの楽器なんだけど、少し変わった楽器なの。手を触れなくても弾けるっていう」
「変なノ…サーニャは弾いた事あるのカ？」
「無いけど、聴いた事ならある。お父様が作った人のお友達なの」
「そうか、サーニャのお父さんって有名な人だもんナ。で…そのテルミンはどんなのだっタ？」
「お父様は『まさに楽器の革命だ、これからは電子の時代だぞ！』とか喜んでたけど…私はよくわかんなかったな」
そう言うと、サーニャは声を立てずに静かに笑った。
「そうだな～、自分で弾いたこと無いのにどんなのって聞く私が間違ってたヨ！」
そう言うとエイラはサーニャよりももっと大きな声で、さらに笑いの輪唱をした。
「でも、私は弾かせてもらえなかった」
「何で？」
「なんでだかよくわからない…けど、多分お父様のお友達にまだ弾いて理解するには未熟だって思われたんだと思う」
「そんなこと無いヨ！」
「エイラ…。」
「だって、サーニャはいい“感性”って奴があるし…それに未熟だからって、そんなの間違ってるヨ」
「そう、かな…。」
「だってサーニャは音楽の、妖精みたいなものダカンナ！」
「そんな、妖精だなんて…恥ずかしいよぉ…」
そう言ってサーニャは、その白い顔を赤く染めた。
「エヘ、ちょっと言ってみたダケ…。」

「何か来るみたい」
和んだ雰囲気の夜間飛行が一転する。魔導針が紅く光り、敵の存在を知らせる。それは遠いが、接近するには時間はかからないだろう。速度はおよそ５００ｋｍ／ｈ。自分たちと同じほどである。
「敵カ？」
「そんなに大きくないよ」
さきほどは肉眼ではとらえられなかった敵も、二言交わす間にもう蛇行しながら近づいて来るのがはっきりと見えるようになる。
「サーニャ、ここから照準できるカ？」
「できるかも知れないけど、自信ない…」
「やるしかないだロ」
エイラの表情が次第に険しくなり、その一挙手一投足に歴戦の勇士としての気負いと経験がにじみ出る。
「いいカ？私が奴の飛ぶ方向を先読みしながら追う。どっちに向かうかはインカムで知らせるから、サーニャはここからフリーガーハマーを撃って奴を手負いにしてクレ。速度が緩んだら私が射撃で仕留めル！」
そう言いながら彼女は背中に背負っていたＭ－１９３１スオムス短機関銃を手に取り、ボルト・アクションライフルのようなコッキングハンドルを引いた。それは全くの冷静沈着であり、気持ちの高揚も恐怖もどちらも見られなかった。
「わかった。やってみる、エイラ。」
その一言を聞くと、エイラは少し頷き、そして急加速した。それはまさにタイガを逃げる草食獣を見つけた肉食獣のようで、彼女の使い魔である黒狐にふさわしい姿でもある。
敵であるネウロイの形をはっきりと視認するまでの距離に近づくまでにはそれほどの時間もかからない。メッサーシャルフＢｆ－１０９Ｇの最高速度、６６６ｋｍ／ｈは紫に光る敵影を追跡するのに十分すぎるからだ。しかし、まだ敵のエネルギーがありすぎる。攻撃

には及ばない。
「上！」
頭を上げたエイラが上昇軌道に入ると同時に、地平線の向こうからフリーガーハマーの無誘導弾が飛来する。時限信管が作動し、ネウロイの手前で爆発する。残念ながら直撃とは至らなかったが、その破壊力は敵の軌道がゆがんだ事からも明らかだろう。
「右！」
緩上昇してバンクを取る敵を、エイラが同じ軌道で、しかしよりシャープに追う。今度は敵も後方に気づいたらしく、ビーム射撃を仕掛けてくる。しかし先読みのできるエイラには通用するものではない。蛇行し、バレルロールを描きながら、次々とそれらを受け流していく。
「下！」
そして雲へと突っ込む。フルスピードでのダイブ！あまりのGに頭に血が回らず、一瞬ホワイトアウトに一直線と行きそうになる。だが必死に正気を保たんと頭を上げ、自らの身体の限界から離れようとする。この高速では、一瞬のコントロールミスも事故につながりかねない。しかし、速度を落とすことはできない。
しかし、その時前方の敵が大きく揺らぎ、一瞬動作を止めて爆風に吹き飛ばされ、きりもみ状態となる。時限信管がうまく敵の動きと同期したのだ。
「エイラ！撃って！！」
インカムの声が、彼女を無意識の世界から引き戻す。そして態勢を立て直し、射撃位置に付く。相手の横を通り過ぎながら全銃弾を集中し、露出しているコアをたたきのめす、そして右にバンクして転進…一撃離脱戦術だ。Ｍ－１９３１短機関銃のトリガーをふさぐように出っ張ったセフティを動かす。
射撃位置に付いた。落ち着いて、Gから解放された冷静な頭で、慎重に狙いをつける。
「よし、今ダ」

発狂した獣のような叫び声を短機関銃が上げ、その銃口から９×１９ｍｍパラベラム弾が吐き出される。その破壊力は拳銃弾であるから決して大きくはないが、回転速度の早いこの短機関銃の手にかかればそれは小さな凶器、スズメバチの針と言ってもあながち間違いではない。
一発、二発、三発…コアに弾頭が当たり、紫色の鉱石が激しく削り取られる。最初こそ耐えるものの、やがてその損害は臨界点に達する。最終的に光を四方八方に放って爆発して、ネウロイは粉々になるのだ。その一瞬の光景を振り返って一瞬見ると、エイラは右下へとバンクして行った。

「すごいね、エイラ」
「な、何て事無イッテ…。」
労いの言葉に、エイラは白い顔を赤らめて答えた。
「いつもの事だヨ…。」
「でも、今日のエイラ、すごくかっこよかった」
「あの接近戦の事カ？」
「そうじゃない…全部。エイラのやったこと全部」
「そんな事無いカラ…なんか、恥ずかしいナア…ウーン…」
そう言ってエイラは、妙にもじもじしながら指を絡ませたり、頭を掻いてみたりした。もっとももじもじしているのはサーニャも同じで、視線を下に向けたまま頬を赤く染めている。これがいつもの二人の関係なのだ。
「あ…まだ何か居るかも」
「今…何テ？」
もっとも、そんな気持ちは一気に吹き飛んでしまったが。

「これ…何なんダ？」
魔導針反応を追って地上へ降りた二人が見たのは、なにやら得体の知れない黒い物体であった。ネウロイのようでもあり、そうでな

いようでもある。こちらに攻撃は仕掛けてこないが、どうするかも分からない。
「エイラ、やっぱり怖いよ…。一旦帰って隊長に報告しようよ…。」
「そんな事やって居ない間に無くなったらどうするんダ？私たちで何とかしないといけないんだゾ」
「じゃあ、私が報告に行くから、エイラはここで見張っててよ…。」
「ソレヤダコワイ…。」
やはりそれは承服したくないだろう。

「やっぱり怖いよぉ…。」
「怖いのは私だって一緒ダ。でも、ここは行かないとだゾ」
ともかく、結局はエイラの意見が通って徒歩で近付き、二人一緒に調べに行く事になった。一応の備えとして、エイラはＭ－１９３１、サーニャはＰＰＳ－４３短機関銃で武装している。といって、至近距離でビームを撃たれたら、どうなる事やら、といったところなのだが…。
「ねえ、言いだしたのエイラなんだから、何かあってもエイラで何とかしてよ…」
「何とかしてって…何をしろっテ？」
「だって、私は付いてきただけだもん…。」
「そ、そんなのヒドイじゃナイカーッ！！」
近づいてみると、その物体は思ったほど大きなものではないようだ。アップライトピアノほどの大きさだろうか？
「何考えてるんだ、こいつハ？」
「ネウロイじゃないのかも」
「ネウロイじゃない！？魔導針が反応したんダロ？」
「何か微妙に違う…」
そのときだった。その黒い物体は急に動き出し、ただの立方体からより複雑な形に変わった。突然の事に、二人はとても驚き、腰だめにしていた短機関銃を構え、引き金に指を掛ける。今にも発砲せ

んばかりだ。
だが、サーニャは違った。ぎこちなくＰＰＳ短機関銃を肩に当てていた彼女は、急にその形から何か思いついたのか、その黒い物体に吸い寄せられるように近づいて行った。
「やめろッ、サーニャ！」
しかし彼女はその制止も聞かず、振り向きもせずその物体に触れる。それを見て耐えられなくなったエイラはとうとう、叫びながらサーニャを連れ戻そうと駆け出した。
「サーニャァァァァ！！」
♪
エイラがサーニャの身体に渾身の力でしがみついた時、突然その物体から不思議だが、美しい音が響いた。それはガラスのように透明感がある、どの楽器とも似ていない類稀なる音色だった。
エイラはあまりの驚きのあまり、しばらく物も言えなかった。一方サーニャも驚きはしていたが、それ以上に好奇心を隠せなかった。すばらしい何かである事を、彼女はその音楽家としての天性で感じたのだ。
「…今の、何ダ？」
「これから鳴ったの」
そう言うと、彼女はその物体にもう一回、ピアノの鍵盤のように触れた。
～♪
今度はより長い、穏やかな音が響いた。
「これ、楽器なのかナ？」
そう言ったとたん、その物体に新たな変化が生じた。サーニャの触れていた所に赤と黒で輝く鍵盤のような物が浮かび上がり、横から背もたれのない椅子のようなものが張り出した。まるで、演奏者を歓迎するかのように。
「これ、弾いて欲しいんダナ…」
エイラも流石に今度は驚かず、サーニャのように興味を持って彼

女もその「鍵盤」に触れて音を鳴らしてみた。
♪…♪
弾きなれてはいなくてぎこちないが、エイラの鳴らした不思議な音が静かに鳴った。
「…なんかすごいナ」
「こんな音が、あるんだね」
エイラはもう一回「鍵盤」に触れてみたが、今度は遅い、やわらかい音が鳴った。それからサーニャが触れる。今度はおもちゃ箱のような、弾む賑やかな音。さまざまな、でも聴いた事のない音が次々と出てくる。
しばらくの間、その不思議な「楽器」の持つまるでおもちゃ箱の中のようなバリエーションに富んだ音を鳴らし、二人はそれが中に含むとても広い音の世界に気がつけば惹きこまれていた。
そのうちサーニャは自分でも気がつかないうちに、過去にピアノで弾いた曲たちのフレーズをこの不思議な「楽器」で奏でていた。それはピアノで弾けば代わり映えのしない曲であるが、これで弾くと音の多彩さで、まったく違う曲に生まれ変わるのであった。
そんなサーニャに気づいて、エイラは言った。
「サーニャ、これで一曲弾いてヨ」
「うん、やってみる」
一呼吸し、サーニャは鍵盤に指を滑らせる。そして、彼女がよく知っている曲をその「楽器」で奏で始める。
最初は不思議な感じに戸惑った彼女も、やがてその広がりのある美しい響きに心を許した。その楽器はその音を、自分の奏でる中で場面に合わせて変えている。しかも、そのすべてが聴いた事のない、けれども自然に受け入れられて、それが音楽になるとなぜか感動してしまう音…。うまく形容はできないが、自分の心がどこか空高くへ飛んでいきそうな気持だった。
「（なんでなんだろう…なんでこんなに、感動しちゃうんだろう？）」

月明かりが差し込み、そよ風が吹き、葉のすれ合う音だけが聞こえていた。あまりのことに、サーニャとエイラは何も言えず森の中に佇んでいた。なにか、とてつもない大きなものが心を通り過ぎたような、謎の感動を心に抱えて。

来た道を歩いて戻る間、二人は一言も交わさなかった。そして、なぜだかよくはわからないが、無意識のうちに手をつないでいた。もう恥じる気持ちも、顔の熱さもどこかに行っていた。

「なあ、サーニャ」

「なあに？」

「明日もここ、行こうナ」

「うん…」

魔導エンジンがまた音を立て、二人はまた、微かな音に満ちた夜空へと戻って行った。

「二人だけの秘密ダゾ？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1176i/

Tell-me-in'（てるみん）

2010年10月8日14時26分発行